

# 書 評 と 紹 介

牧 民雄著

## 『ミスター労働運動』

城常太郎の生涯』

評者：永原 丞

冒頭に著者と著書表題の人物・城常太郎との関係について、ご紹介しておきたい。

城常太郎は著者・牧民雄氏の曾祖父である。

著者は大学の講義（近代労働運動史）の中で城常太郎の名前を耳にし、また黒板に書かれた「城常太郎」の文字を目にし、遠い幼い頃、著者が曾祖母の膝の温もりの中でよく聞かされていた言葉が蘇った。それは「死んだひい爺さんはね、この国の労働運動の『元祖』だったのよ」（8頁）の一言であったという。

そのとき以来、在野の研究者として城常太郎研究に歳月を費やされ、出版の運びになったようである。著者は曾祖父の足跡を探り続ける過程で、城常太郎に纏わる通説記事に疑問を覚える「新史料を発掘」されるなど、調査活動の苦労や新発見の感動が文章の随所から読みとれる。「あとがき」に著者は「自分の人生の約半分を費やして打ち込んだ素人研究」と記されているが、玄人跣の研究資料収集力と史料分析による労作である。著者に対し先ず敬意を表したい。

本書の論評の適任者とはいえないが、日本労

働運動史に興味を持つものとして、城常太郎の足跡を追求した経緯もあり、浅学ではあるが本書の紹介と内容をめぐる若干の考察を行うことにしたい。

本書は、黎明期日本の労働運動の出発点とされる「労働組合期成会」の発起人の一人とされ、かつ、期成会の前身とされる「職工義友会」の創設者・城常太郎の「ライフストーリー」（11頁）である。

本書は序章・あとがきと16の章および城常太郎年譜・巻末資料・関連文献一覧・図版一覧から構成されている。

### 1. 本書の概要

序章「かね婆ちゃんに導かれて」では、城常太郎の生い立ちやその系譜について綴り、肉親としての著者でなければ史実を記録できなかったことであろう真実を提供してくれる。

第1章「城常太郎の - 夜明け前 - 」は、城常太郎が靴職人の修行へのきっかけとなる西村勝三との出会いからアメリカに旅立つまでの背景が述べられている。

第2章「明治のアメリカンドリーム」では、日本人靴工らの集団渡米に至るまでが述べられている。明治22年4月、城常太郎から第1回の米国靴業界事情視察報告を受けた西村勝三は、労使の親睦を目的とした「伊勢勝靴工旧友会」創立総会の席で海外渡航を奨励、それに乗じた関根忠吉が西村の援助を受けて渡米。早速、城常太郎の靴屋で仕事を開始。

城と関根は、米国人製靴工場主チースより20名の「日本人靴職人の斡旋依頼」（41頁）を受け、労働条件の良さに「まさにまたないチャンス」と申し入れを承諾した。関根忠吉は滞米僅か2ヶ月でいったん帰国して、靴工の渡米希

望者を募り、明治22年10月、「関根は靴職工14名を率いて横浜港より」(44頁)出港する。

第3章「日本人バッシングを乗り越えて」では、城・関根ら日本人靴職工総勢16名が「白人靴工労働同盟」はもとより、「製靴工場主同盟」からも激しい抗議や迫害を受ける過程が明らかにされている。その後、白人靴工らによる迫害体験を通し城は「労働問題」に強く関心を抱き、「労働問題勉強会」を始める。明治24(1891)年仲夏には、「勉強会」から「実践的な労働者の組織を目指した」労働団体としての「労働義友会」(55頁)に名称変更を行ったという。更に、著者は「従来の歴史書では、サンフランシスコに初めて開設されたこの労働団体を『職工義友会』と記述されてきた。しかし、筆者の発掘新資料によると、当時はまだその呼称は使われておらず、正式には『労働義友会』と呼ばれていたことが判明した」(55頁)と論じている。

第4章「ミッション街の熱弁士」において、城常太郎の一時帰国中の足取りと活動が明らかにされている。著者は、明治24年10月16日付『経世新報』に報じられた「城・平野からの一篇の意見書」の中に、通説では「義友会」の発起人のメンバーとされている高野房太郎・沢田半之助らの名がないことから、「高野も沢田も、発起人でなかった可能性が高い」(64頁)と分析。更に、明治25年春、城は一時帰国して、「労働義友会東京支部を新設し、日本における労働運動の発火拠点」(74頁)を置いたという。この東京支部が「日本靴工協会」に関与し、「明治25年暮れに勃発した靴工兵制度反対運動」(74頁)に大きな影響を与えたと、著者は推察している。この年、城は熊本の「大川かね」と結婚。暮れには、新妻を伴い再渡米した。

第5章「立ち上がった靴職工たち」では、陸軍省が、軍自ら軍靴製造に乗り出す「靴工兵制度」を提案。この問題に対し、明治25年12月21

日、帝国議会に向かって行われた示威運動について、著者は、調査により「サンフランシスコに再び帰米した常太郎が、労働義友会・東京支部を通じて日本靴工協会の運動を指導していたことを裏付ける新史料が見つかった」(79頁)。それは、明治25年12月23日付の『よろづ朝報』に「9月上旬、元と桜組の職工たりし銀座3丁目城常太郎なる者主唱者となり新たに靴工協会なるものを起こし政府案排斥の運動をなさんことを企てたり」(81頁)の記事がそれという。

著者は、「靴工兵制度反対運動は失敗に帰したが、・・・この運動をもって、日本における近代的労働組合運動の開始と位置づけてもあながち間違いではないのではないか」と推測している。

第6章「カリフォルニアの靴工同盟」では、白人靴工の迫害は「白人靴工同盟」の援助を得て過激さを増す。この対応策として「労働義友会」の呼びかけによって、「加州日本人靴工同盟会」設立に至る経緯が明らかにされている。明治26年1月発会式は挙行され、その後徐々に迫害や嫌がらせは収束に向かったようである。

第7章「『戦後の日本矯風論』発掘！」は、著者が城に関する文献捜しの過程で、城常太郎著による現存する出版物『戦後の日本矯風論』の小冊子・16頁の発掘の喜びが語られている。

第8章「リーダーたちの帰国ラッシュ」では、帰国後の近代労働運動の拠点をつくる様子が読みとれる。城常太郎は、労働運動の拠点として帝国議事堂と同じ麹町区の内幸町に自宅兼活動事務所を置き、明治29年4月下旬、木下源蔵と共に「職工義友会」の看板を掲げた。著者は、「サンフランシスコ時代に使われていた『労働義友会』という名称を、日清戦争後、工場賃金労働者(職工)の数が急速に増えたわが国の社会情勢をかながみて、日本では『職工義友会』という名称へ変更した」(116頁)と述べてい

る。

第9章「労働運動、ついにスタート」では、渡米仲間の強い絆で「職工義友会」の礎石が築かれたことを知ることができる。明治29年12月労働組合法制定を求める請願書を衆議院に提出する署名活動を再開することとなる。

第10章『『職工諸君に寄す』の謎』では、「日本に於ける労働運動の最初の印刷物」の起草者について、「この歴史的檄文が誰の手により記されたのか？」(142頁)、著者は疑問の解明を試みている。著者は、「高野房太郎執筆が定説となりつつある」が、「城常太郎ではないか」と仮説を立て、その検証を行っている。

第11章「現場オルグからステージへ」では、明治30年6月25日、第1回労働講演会開催の盛況なる大集会(約1200人)に至るまでの苦労の一端が窺える。

第1回演説会では、「職工義友会」を代表して城常太郎が開会の辞を述べ、5人の弁士は、それぞれの立場で労働組合の必要性を説いた。講演終了後、「労働組合期成会」の組織化を来場の聴衆に呼びかけて賛同を得たという。

#### 第12章「暴漢に襲われ、病に倒れ」

7月18日、労働組合期成会による第1回演説会で城常太郎が開会の辞を述べ、この演説会以後、城は組合活動からもブツリ姿を消していた。その理由は、講演会が終わった直後に、暴漢に襲われていたのである。その襲われた状況について城の妻かねの証言では「滅茶苦茶に殴られ、ひどい重体で、ウンウン言って苦しんで寝込んでしまった」(169頁)と語っている。ケガで活動できなくなった城の体に、追い打ちを掛けるかのように結核菌が増殖し、平野永太郎の薦めにより、神戸に転居して、転地療養に努めることとなる。

第13章「関西に命をかける」では、神戸に運動拠点を置くために移住し、病をおして必死に

労働者の啓蒙に努める姿が見えてくる。関西の各工場を歩き回り、地道な活動を通し、明治31年春「神戸靴工協会」、同年12月には関西の近代労働運動の先駆けとなる「労働組合研究会」を立ち上げている。

#### 第14章「ピークを迎えた明治32年」

明治32年7月には「清国労働者非雑居期成同盟会」を結成、大規模な演説会を計画し、東京の「労働組合期成会」に遊撃隊の援護を要請するも、資金不足を理由に派遣を得ることができなかったが、大阪の「大日本労働協会」会長・大井憲太郎の協力を得て7月31日、神戸の劇場「大黒座」では聴衆2500人を超える盛況ぶりであったという。

#### 第15章「中国サクセスストーリー」

労働運動に致命的ともいえる弾圧立法「治安警察法」の施行により、穏健な社会改良を目指していた城や高野も警察の厳しい目を意識せざるを得ない状況となったようである。明治33年8月、高野は中国天津に移住。城も懐妊中の妻かねの出産を待って、明治34年2月、妻と新生長女(静子)を伴って天津へ移住した。天津では靴店とラムネの製造販売事業を始め、事業は繁盛発展していったという。

#### 第16章「復活、再発、そして死亡」

労働運動の思いは断ち切れず、妻と娘を天津に残し、単身帰国。大阪に住居を置く。「社会主義協会」の片山潜と西川光二郎による演説会(明治36年1月31日、土佐堀青年会館で開催)の協力者として演説依頼を受ける。久しぶりに「聴衆を目の前にして常太郎は、自分の労働運動家として『復活』したことを感慨深く噛みしめたに違いない」(211頁)と著者はいう。

一時小康状態を保っていた肺結核の再発により、家族の居る天津で治療をするも、回復の兆し無く、妻かねの決意によって、城常太郎は日本(大阪)の病院で入院治療を送り、明治38年

7月26日、42歳の若さで世を去る。

## 2. 内容をめぐる若干の考察

以上の内容からもわかるように、本書は明治期労働運動史を先学の研究文献や新聞記事などを手がかりに纏め上げられたものである。特に興味深い章を取り上げて若干の考察を試みたい。

まず第3章の米国に於ける労働団体の名称である。これまで通説として定着していた「職工義友会」を、著者自身による発掘新資料を基に「労働義友会」と書き換えている。名称変更に係わる発掘資料について特段付記されていないが、79ページの東洋自由党機関誌『新東洋』と82ページの『よるづ朝報』の報道記事からだと思われる。この名称について、二村一夫教授は「黎明期日本労働運動の再検討」(『労働運動史研究』62号)で、『労働世界』は義友会の関係者が執筆したとみられるのに対し、『経世新報』は報道記事であるから、この場合は当事者にしたがって「職工義友会」の名称を取るとされている箇所である。

第4章・第5章に関連して、先ず一つは「義友会」創立メンバーについて、著者は「高野も沢田も、発起人ではなかった可能性が高い」というが、その根拠の実証が欲しい。このことについて隅谷三喜男氏、大島清氏の先達の研究論文を精査されて纏められた二村一夫教授論文『労働運動史研究』62号所収には、高野房太郎は1890(明治23)年10月から1892(明治25)年2月までサンフランシスコにいたとされている。また、沢田半之助については『在米日本人史観』の付録「元祖しらべ」のなかで、明治23年渡米、翌明治24年城靴直し店(義友会事務所併設)に同居して洋服屋を始めていることがわかる。したがって、発起人メンバーであった可能性のほうが高いと思われる。

もう一つは、明治25年春、一時帰国した城常太郎が「労働義友会・東京支部」と「日本靴工

協会」を新設したことと、日本靴工協会への加入者が600名近くなった頃、再渡米して、米国から靴工兵制度反対運動を指導していたという史実について、評者は今回の著作で初めて知る機会を得た。貴重な資料である。欲を言えば「日本靴工協会」の組織形態や中心的なメンバーの顔が見えない。関連する当時の資料の更なる発掘に期待したい。

第8章の「職工義友会」事務所設立日付について、著者は「明治29年4月下旬」と論じられているが、『労働世界』第15号(明治31年7月1日付)掲載記事による、「明治30年6月中旬」が通説となっており、この二つの間に約1年2ヶ月間の開きがある。著者がいう年月を立証できる資料について知りたいところである。

第10章で著者は「職工諸君に寄す」の起草者を城常太郎と仮説を立て検証を試みている。結論は、城の思想が「職工諸君に寄す」に大きく反映しているとして高野房太郎単独執筆ではなく、城の原稿を高野がアレンジして出来上がった文章だという。著者は城に対する熱い思いが詰まった評価を与えているが疑問が残る。

## おわりに

歴史(労働運動史)を整理し語ることは簡単なようで、非常に困難な作業である。整理の仕方によっては、事実が歪曲され史実が失われてしまうこともある。特に歴史研究において十分注意しなければならない。

本書は叙述において、研究論文的な硬さや、読み辛さなどなく、著者の曾祖父・城常太郎の短い人生を通し、近代日本の黎明を告げる労働運動史を事実に基づき教えてくれる良書である。多くの人に読んで欲しい。

(牧民雄著『ミスター労働運動 城常太郎の生涯』彩流社、2006年4月、254頁、定価2000円+税)

(ながはら・すすむ 近畿大学産業理工学部教授)